

Title	天理大学附属天理図書館蔵『ふくろのさうし』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1988
Jtitle	三田國文 No.9 (1988. 6) ,p.59- 63
JaLC DOI	10.14991/002.19880600-0059
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19880600-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天理大
学附属
天理図書館蔵『ふくろうのさうし』解題・翻刻

石川 透

解題

本誌前号の「天理大
学附属天理図書館蔵『落窪物語抄』解題・翻刻」(三田国文』第八号)に続き、同じく『落窪物語抄』所収の「ふくろうのさうし」(内題)を翻刻紹介する。目録題を『落窪物語抄』とする書物の性格、並びに書誌については前号を参照していただきたい。本解題では、「ふくろうのさうし」についてのみ、若干の考察を加えたい。

「ふくろうのさうし」は、その名の示す通り室町時代物語の一品である。しかし、従来知られていた『ふくろふ(うそひめ物語・鳥物語)』とは、その内容が大きく異なる。すなわち、松本隆信氏『町室町時代物語類現存本簡明目録』に掲載された『ふくろふ』諸伝本のうち閲覧可能な伝本には、本書と同系統の作品は見出し得ないのである。

それでは、「ふくろうのさうし」の内容を紹介し、従来知られていた『ふくろふ』との相違点・類似点をみていきたい。

「ふくろうのさうし」の内容は以下の通りである。

近江国浅井郡田根庄木尾に、ふくろうのむくの介則次(則統)が住んでいた。弥生の中ばに則次が花見に行くと、折節五位の少将も来ていて、則次は一目惚れをする。則次は醍醐の薬師に祈請し、その甲斐あって、五位の少将に仕える白鷺の四郎に会う。則次は四郎に少将への気持ちを打ち明け、四郎も今昔の恋の例を話して則次を慰める。則次は一首の和歌を四郎に託し、四郎は少将のもとに帰り、このことを少将に話す。しかし、少将は手紙を返すようにと雀の八千世に運ばせる。則次はさらに和歌を記し、八千世に持たせる。八千世は持ち帰り、四郎と語り合って少将が返事を書くように勧める。とうとう少将は返事を書き、則次のもとに行くこととなる。少将は則次をあさまじいと思いつつも、年月を経て、こふくろうを生む。こふくろうは二人に育てられ、それを見た鳥達により和歌が交互に詠まれる。

以上のように、ふくろうを中心とする恋愛譚が本話の骨格である。室町時代物語の分類でいえば、異類恋愛物の中に入れるべきであろう。これが七五調の雅文を中心にして記されているのである。

これに対して、既知の『ふくろふ』の内容は、以下のようなものである。

加賀国亀割坂の麓に、八十三歳のふくろふが住んでいた。ある日、鳥の九郎左衛門、鶯の新兵衛を近付けて、あねは山の管絃で琴をひいていた鶯姫が忘れられないので、手紙を届けて欲しいと言う。しかし、鳥と鶯は、山雀やまがらこのこさくに頼みなさい、と答える。ふくろふは山雀の宿に行き、頼むと山雀は了解したので手紙を細かに書いた。ふくろふは、み山の薬師によい返事を賜るように願書を捧げる。一方、鶯姫は一度は手紙を受け取らなかったが、山雀に口説かれて返事を書く。返事を見たふくろふは、その内容を誤解したが、み山の薬師が夢に現われ、その意味を解き、阿弥陀堂で鶯姫と契ることになる。これによって諸鳥から和歌を贈られる。しかし、以前から鶯姫に懸想していた上見ぬ鶯は、討手を差し向け、結果的には鶯姫を殺害してしまう。ふくろふは、自殺しようと思うが、思い止まり、剃髪して諸国を廻り、鶯姫の菩提を弔った。

これは、『ふくろふ』諸伝本中、『寛永』刊絵入大本を底本とした有朋堂文庫本等を元にしたものである。この系統の伝本は最も多い。

この系統以外の静嘉堂文庫本・東大国文学研究室蔵本も、それぞれ異同はあるが、大筋はこれと同じである。

以上の二つの内容を比較してわかる通り、両者はふくろふの恋愛譚という点で一致しているが、その細かな内容は大きく異なっている。特に、『ふくろふ』の方は、宗教的色彩が強く、多くの説話が入り込むなど、筋はより複雑である。実はその分量も、『ふくろふ』〔寛永〕刊絵入大本は、「ふくろふのさうし」の三倍以上もある

のである。

ただし、話型としては、ふくろふが恋をし、代理人を通して相手に文を送り、相手はこれを拒むが、やがて成就する、という点や、それぞれに薬師が重要な役割を果している点で一致している。さらに、『ふくろふ』のうち東大国文学研究室蔵本には、

ふくろふのむくのすけ殿

とあるように、ふくろふの官職名が一致している伝本もある。しかし、『ふくろふ』諸伝本のそれぞれが本文に影響関係が強く認められるのに較べれば、「ふくろふのさうし」の本文は『ふくろふ』からは完全に孤立している。

『ふくろふ』がより複雑な内容で比較的新しい印象を与えることを考えるならば、「ふくろふのさうし」の方が原型に近いのかもしれない。しかし、『落窪物語抄』のような抄出作品と一緒に収められていることを考え合わせれば、「ふくろふのさうし」が『ふくろふ』の筋を借りて作られた、と思われなくてもいい。いずれにしても、室町時代物語のことであるから、その成立の前後関係は速断できないであらう。

以下に、目録題『落窪物語抄』のうち、「ふくろふのさうし」の全文を翻刻する。翻刻に際しては、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に改行、句読点を多く施した。

最後に、翻刻掲載の御許可を賜わった天理大学附属天理図書館に厚く御礼申し上げたい。(天理大学天理図書館本翻刻第四二六号)
(附録)

ふくさうのせうし(内題)

むかしも今も恋ほとやさしき事はなし。人間の事は扱をきぬ、鳥類畜類までも恋をして心を尽す哀さよ。

所は近江の国あさ井のこほり、たねのしやう、きのをのかうのうち、むしは山に住鳥、名をはふくろうのむくの介則次とぞ申ける。

比は弥生半の事成に、一むらさめのつれづれに、花を見はやとおもへとも、あたりに花もなきまゝに、こうせんしと成らんに、花のあるよしきゝ、上なる山に立越、しものけしきを詠れば、寺はむかしにあれば、はにふのこやのいふせきに、花は昔の香を残し、色となる有様、都は未みねとも、地主のさくらや大原の、嵯峨うつまさの花にても、是にはいかてまさるべき。

おりふし五るの少将、是も徒然の余に、花を詠めていまひしを、則統一目みるよりも、心もそらにあこかれて、あるにもあらぬ風情也。五位の少将是を見て、恥かしけなる風情して、はねうちたれて立にけり。

則統心は爰にとゞまれ共、扱しも有へきにあらねは、我山さしてそ帰りける。

角て日数もつもりつゝ、おもひはいやましに成行は、朝夕ほうくとしたる有様を見、山がらすの声くんに、払ひのゝしる折くは、腹立してそ居たりける。

兎に角に、昔も今も仏神にいのり申事は、必叶ふ事なれば、われもさこそとおもひつゝ、だひごのやくしへこもり、さまくのきせいをそいたしける。

参籠のしるしにや、七日と申昼程に、いつくともしらす、白鷺一羽飛きたり。則次うちより、御身はいづくより御まいり候やらんと、くはしく尋ける程に、

我はこうせん寺山に住玉ふ五位の少将とのにつかはれ申、白鷺の四郎と申者にて候と、かたりければ、

則統嬉しさ限なく、又はむね打さはきつゝ申けるは、申につけて憚おほく、又はうちつけなるやうに侍れとも、いつそやそのあたりの花の盛の折ふし、なかめる給ひし少将殿の御姿、一目見しより我心、ふかくそめなすからあいの、やしほも浅き袖の色、こかれあふみの悲しさに、此御寺にまいり、御ちかひをたのみたてまつる。その甲斐ありて、けふしも御身にあひたてまつる事、只他生のえんなりと、くはしく是をかたりければ、

侍従も心ある物なれば、あれの上鴈も花の木陰にて、見馴ぬひとを見給ひて、はつかしなとゞねに語られ候なる。扱も恋と云事は、御身ひとりにかぎらず、昔も今もためしおほき也。

さ衣の大將は、あすかひの姫君を心をつくし玉ふとかや。光源氏の物かたり、しなくおほき事ながら、朧月夜の内侍のかみ、をほろけならぬちきりゆへ、須磨のうらみに身をこかし、藻塩たれしも誰ゆへと、わすれかねにし事とかや。

又在原のなり平は、二条の后をぬすみとり、武蔵野の煙にむねを焼、鬼一口にきもをけし、おもひのみちのおく迄も、まとひありきし物思へは、是も彼もたゞ恋路の行衛なるへし。

けにくさやうにおほしめさは、ついにふみわけ給ふへき、ちきりの程はしらねとも、みちしはしにてまつらんと、濃く語慰むれば、なのめならず悦で、心つくしの数くを、いはとおろかに成ぬ

へし。

心をみするよすかとして、一首の歌をそ書にける、

余所に見し花の面陰晴すのみ

心にかゝる折くそうき

加様に書て引むすひ、侍従にたひければ、暇申て帰りけり。

折節少将殿は、暮かゝる春の気色、物あはれに打詠ておはしけり。

侍従かへりて申様、をそくけかう申つれば、御つれくもさこそと

申慰め、其後彼文取出し、有しなからの事共語ければ、

少将顔うちあかめて、さやうの人のことのはな、誠と誰か夕煙、あ

たになひかは秋風の、空にたつなをいかせん。ふみをはぬしに返

せとて、手にふれしさへつらけにて、しやうし引立入れければ、

磯辺によする波の、うちかへさるゝたまつさを、雀の八ちよにもた

せつゝ、むしは山へそ返しける。

則統八千世にかくなん、

ふみ見すは甲斐やあらんと神代より
ちぎり定し天のはし立

加様にかきて引結び、なをこりすまに夕けふり、我心さへ恨めし

と、涙なからに立出て、八千世にこそは出しけれ。

やちよ程なく帰り来て、おもひこかるゝありさまを、侍従と友にか

たりつゝ、左耳人のつれなきも、報ひある世と承か、人のしたひも

とけ給ふへき事は、御心のまゝにてこそ候へ。一筆の御返事に、人

の心をなくさめられ候へかして、申ければ、

実もとやおもひけん、うすみどりのうすやうに、いとほつかしけに

てかくなん、

たのましな立るる雲のあたにのみ

心さためぬ花のまよひは

とかきてさし置ければ、侍従取あけ、御返事とてやりにければ、

則次なのめならず悦で、つゝにいひより吉日をそ定めける。比は卯

月なかはの事なるに、むしは山へむかへけり。

むくの介嬉しさに、爰へくはうくそよびたりける。

少将は声うちきくより、あさましや、おなし生を請るならば、やさ

敷人ともちきらすして、姿から声からひと敷もなくして、空の

気色もはれぬれば、のりつけくとの給ふも、けすしくたえく敷

もおもへとも、藤から咲みたれ、時鳥折くをとつれかゝる気色に

なくさみて、年月を送りける程に、くはいにんして、いたいけしたる

こふくろうをそまうける。

ふくろう余のうれしさに、目もはなさすなかめつゝ、うしろの方に

てあそひけるを、あまりにみをくりける程に、くひはくるくまは

るとかや。

こふくろうはほうくくとあまへければ、母の少将はきやあくくとそ

すかしそたてける。

からすうちにてかくなん、

ふくろうのふくたのしけなる有様は
わらふ鳥のことほりそかし

とわらひければ、ふくろう返し、

夏からす何にかさ程あひぬらん
口あきぬたるさまのきたなき

と返しけり。又五あよめる、

はやふさのなき世なりせはいか計

こいの心の長閑からまし

又しら鷺のよめる、

ねらふへきとしやうもみえぬ海口に

身のけさへたつ雪のしら鷺

すゝめのやちよかくなん、

雪はふれ賤かかきねの村雀

ほろひいすかた哀ともみよ